

3 Honey Maid ねくすとっ! よん!

「んっ、んっ……あっ、あぁっ、あなた、あなたぁ……!」

あたしの胎内を、這い回る指の感触。

何度も何度も、滑らかに濡れそぼった臍道を奥入手前へ、動き回る。

「うんっ、もっとな、もっとな……気持ちいいのぉ……!」  
「もっとな、たんさん、あなたが欲しい……!」

溢れ出る蜜液に塗れ、じゅぷっ、じゅぷっとな首を立てて、その指はあたしのナカを何度も何度も蹂躪するみたいにな、這い回る。

「あっ! だめ、あなた、もうすへ、あたし……!」

あたしの力フタに電流が走るような感覚。

軽く背筋がびくびくして、震える。

「おねがい、もう少し、もう少しなのぉ……!」

一際きゅっとな縮まるあたしのナカ。

それは、しっかのさりと離れなごうに「その指を締め付けろ。」

「んっ、んっ……!」

かき回してえっ!」  
指の出し入れが激しくなり、部屋の中に粘液をこね回すような水音がさらに激しく響く。  
「あぁっ、あひいいいっ!」 だめ、んっ、んっ!  
おねがい、あなたを、あたしにっはっ、ちよっだい……!」  
……!」  
あたしは愛する人を呼び、全身をわななかせろ。  
「んっ、んっ……!」  
びくん、びくんっ、と、全身が快樂の波にさらわれて歓喜するみたいに、激しく痙攣する。  
「あぁ……!」 はあっ、はあっ、はあっ……!」  
痙攣が落ち着くと、あたしは身体中汗まみれで、大きく肩で息をする。  
全力疾走した後のように、切らせた息を、少しずつ落ち着かせてっへ。  
そっとな、落ち着いてっへ、井戸に響くのはなごうとも言えぬ気だぬぬ。



5 Honey Maid ねくすとっ! よん!

滲み出た汗が冷たく冷えて、べったりと纏わり付くみたいな感覚と相まって、自分のカラダがものすごく重たく感じる。

そして……たった一人、満たされない空虚な残滓感と、  
そして……罪悪感。

「まだ……しっちゃった……。」「めんなさい、あなた…  
…」

暗闇の中に、愛する彼の顔を思い浮かべる。

「あと、4日か……。お願い、早く、帰ってきて……。」「

第6話 メイドさんとご主人様の

いちやらぶえっち事情

メイドさんだつてご主人様が

欲しいんです！

「はあ……、昨夜も、まだやっちゃったなあ……………」

夜の間に冷えた汗と一緒に、重く、重く纏わり付く感覚は嫌いだ。

「……………とりあえず、シャワー浴びよう……………」

重たい身体を無理矢理持ち上げるみたいに、あたしはそのそと身体を起こす。

「はあ……………でもこのままじゃ、どうもまずいよね、

あたし……………」

ホントあたし、このままだよ……………」

Hしないといられない身体になっちゃってまぼろさるよう  
な気がして……………」

こんなので、ホント、大丈夫なのかなあ……………？

う、憂鬱なんだろう……………」  
それは隣に誰もいない肌寒さのせいだけじゃない。  
おなかの奥に太いモノが挟まっていた残滓的感覚がな  
い物足りなげ。

そして。

なんとも言えぬ、後ろめたさが、カフダに重くまとわり  
つ……………」

「びっしたの、早稀ちゃん。そんなに深刻に眉間に皺寄せ  
ちやうど……………」

教室で顔を合わせるなり、雪菜ちゃんから心配なわてこ

まった。

「あ、う、うん、大丈夫。たいしたことじゃないんだ」

「そっなの。」

首を傾げる雪菜ちゃん。

いかにも全然信じてなさそうなの。

「まあいつか。それより早稀ちゃん、今夜は空いてる。」

「今夜。」

「うん、早稀ちゃんのだんな様、今お留守なんですし。」

「うん、そうだけど」

よん！

「早稀ちゃん、今夜予定空いてたら、多分一人じゃないかなって思ってる。久しぶりにうちに夕食食べに来ない？」

「うん、この2日くらい、元気がなさそうだった」

雪菜ちゃん、気を遣ってくれたんだ……。

「うん。」

「いいよ。じつはちよつとつちも旦那様が留守してるん

で、わたしと春菜だけなの。今夜一晩、一緒にいてくれる

と嬉しいんだけど」

雪菜ちゃんの気の遣い方は、氣遣われる側にも優しい。

と同時に、ささげなぐ断りたがる雰囲気も持っているの

が上手。

「うん、うん、メイドとしてはまだまだあたし、全然

敵わないと思う。」

でも、正直、ずっと独りであるのは淋しかったから素直

に雪菜ちゃんの申し出はありがたかった。

これは、雪菜ちゃんの好意に甘えさせてもらおう。

「わかった。ありがとう、雪菜ちゃん」

「じゃあ、今日は一緒に帰ろうね」

「うん」

「ちよつとね。」

「きんこーんかーんこーん。」

「はい、全員席に着いてー」

チャイムの音と共に担任の刻田先生が登場。

「じゃ、また後でね」

「うん」

雪菜ちゃんも自分の席に戻っていった。

本当に、持つべきモノは友達だね。

雪菜ちゃんの背中を見ながら、ふとそんなことを思った。

その日の放課後。

「それじゃ、一緒に帰ろうか〜」

そう言いつ雪菜ちゃんの隣には。

「あれ？ 都ちゃん……」

「うん、私も今夜、一緒に泊まるつもりになったの。

よろしくです……」

「もしかして、都ちゃんも、今夜は一人なの？」

「そういつわけじゃないんだけど……せつかへの機会だから、行ってきなさいって、タンナ様が」

「そうなんだよお。わたしが電話口で説明はせてもらって、お許しもらったんだけど、都ちゃんの旦那様、とても優しく

いんだよ〜」

「そうなんだ」

「あはは……恥ずかしいです……」

はにかむ都ちゃん、いつにも増して可愛さ。

「そんなわけで、今夜は女の子だけのお話、たっぴりしちゃいまじゅうらう」

「そうだね。こつこつ時でもないし、なかなか出来ないもねね」

雪菜ちゃんの言葉に、あたしも頷く。

「ですねえ……。普段はそれぞれタンナ様から離れることってないですもんねえ」

「うんうん」

「それじゃ、行こう」

「うん」

あたしたちは3人で教室を出る。

「そう言えば、私は学園の寮に足を踏み入れるの、初めてですな」

9 Honey Maid ねくすとっ!

よん!

「お互い、ご主人様のいる身だから、なかなか招待し合っ  
つてわけにもいかないもんね」

「なかなかスケジュールが空いてる日も重ならないしね

……」

「まあ、今日は半ばダンナ様に無理矢理お願いしちゃいま  
しただけね、私」

「あははははっ」

あたしたち3人、顔を見合わせて笑う。

「すんなり笑って許してくれる辺り、優しいごよね」

「え? でも、雪菜ちゃんや早稀ちゃんのダンナ様だって、

嫌な顔しないと思っけど……ごうなのっ」

「そっだねえ……うちの旦那様もいらぬって言うってんね

そっ。春菜の世話も言えぬってごうなのっ」

そこで、雪菜ちゃんも、「早稀ちゃんの方はいっなのっ」

というような視線をこちらに向け返す。

「う〜ん……うちも、特に嫌な顔しなせぬっ。でも……」

「っせぬっ」

「でも、やっぱりあんまり頻繁にはそっいうこと、あたし  
の方が言いたくないかな。できるだけちゃんと、側に付い  
てたいから」

「うん、わかるわかる。あんまり旦那様と離れたくないよ  
ね」

「私も……今日は特別ですけど、ダンナ様の側でお世話し  
たくて一緒になっただもんと」

「そっだねえ……。みんな同じだね」

「あははっ、うんうん。そこそこは変わらないね」

あたしたちは3人、顔を見合わせて笑ってしまった。

「おや、みんなどうも〜」

雪菜ちゃんの部屋に通されるのを待つ。

「あー! ママー! おかえりなせーい!」

春菜ちゃんが奥から飛び出してきて、雪菜ちゃんに飛び  
ついた。



「それはそうだよ。だって、お母さんだもの」  
「それもそうだね」

ちなみに当の春菜ちゃんは、雪菜ちゃんのすぐ隣で、静かにお絵描きをしている。

そんな二人を見比べていた都ちゃんは、少し羨ましそう。  
「でも、二人すくすくそつくりだね。雪菜ちゃんのちっちゃい時もあんな感じだったのかな？」

「うん、うちの旦那様にも時々言われるよ。ちっちゃい時のおまえそのまんまだって」

「あ、やっぱりそうなんだね」  
「都ちゃんがにこにこ笑う。

「そう言えば雪菜ちゃんところも、旦那様と幼馴染み同士なんだよね」

「うん。でも、わたしからしたら、ちっちゃい時の旦那様みたいだなって思う時もあるよね。」

「いいなあ……私も、ダンナ様のちっちゃい頃、見たかったなあ」

旦那様とはだいぶ歳が離れている都ちゃんが羨ましそうに言う。

「写真とかはないの？」

「うん、あるけど……あんまり見る機会ないから。根掘り、あれこれ見せてって言うのもなんだしね」

「それもそっか」

「それに、ダンナ様との間に赤ちゃん産まれても、雪菜ちゃんや早稀ちゃんみたいに、彼のちっちゃい頃思い出すなんて事もできないから、ちょっと羨ましいなあ」

「都ちゃんは旦那様ともっと近い歳に生まれたかった感じ。」

「そうだねえ……歳離れてて良いこともないわけじゃないから、その辺は半々なあ。」

「むしろ、あたしたちの場合は歳離れてた時はどうなったのか、想像も付かないわ」

「だねえ……。でも、結局、わたしたちそれぞれにピタリ旦那様が、たまたま歳が近くてすく側にいたかどうかが」

12 ……ってことだから……「わばかりは巡り合わせだよね

話え」

第6 「そっだよねえ……。無い物ねだりしても、しょうがない

か」

「うんうん」

そこで、ちょうどアフォームが鳴った。

紅茶の時間がなっ

「あ、できたみたいね。はい、みんな、紅茶どうぞ」

ティーポットから3人分のカップにお茶を注ぐ。

「あ、いい匂い……」

春菜ちゃんが鼻をひくひく。

「春菜はまだダメよ。身体に良くないから。もっとおっき

くなっただけ」

「はあ……」

「春菜はまだ甘い飲み物じゃないとダメでしょうっ。は

い、リン「ジュースね」

「うんっ……」

春菜ちゃんは自分のマグカップを抱えるように持って、

「くくく」とジュースを飲む。

なんか可愛いな。

「あらあら、そんなに一気に飲んじゃって……喉渇いて

たっ」

「そっじゃないけど……なんだか飲みたくなっちゃった」

「そっなの？ うん……やっぱり、ちょっと緊張しちゃ

ってるのかなあ？」

小首を傾げる春菜ちゃん。

「春菜。いいわよ。奥に行っても」

「うん。」

「いいわよ。ママはちょっとここでみんなとお話あるけ

る。」

「うん、ママ」

そう言っ、春菜ちゃんは奥の部屋へお絵描き途中のス

ケッチブックを抱えて引っ込んでいった。

「じゅんね。あの子、ちょっと人見知りしちゃったかも

「なんか、ごめんね。急に押しかけちゃった形になっちゃったね」

「いいのよ。わたしが誘ったんだし。たぶん、都ちゃん、今日初めてだったから、ちょっと緊張しちゃっただけだと思うから」

「だといけれど……」

「まあ、お食事とかもあるし、一緒に過ごすうちに打ち解けるわよ、きっと。そうだ！あとでみんなと一緒に風呂呂入れば良いんじゃないかしら」

「でも……4人だとちょっと狭くない？」

「この寮の部屋の作りを知ってるから、確かにうちの寮、彼と2人とかで入る分には十分な広さがあるけど、さすがに4人だとどうなのかな……と、ちょっと引かかったのだ。」

「ああ、うちは家族3人で入ってもまだ少しゆとりあるくらいだから、大丈夫だよ。この寮で各階のうちの側の端が、いちばん広いタイプの部屋だから」

「そうなんだ」

「そっか。寮の部屋も、それぞれなのかな。」

「学生寮だから、この部屋も同じなのかなと思ってたけど、そういうのは、この学園はメイドとご主人様が一緒にだけじゃなく、子供作っちゃったりするわけだから、当然カッブル向けからファミリータイプの部屋とか、それぞれあってもおかしくない訳よね。」

「そんなわけだから、あとでみんなで見に行きましょう」

「なんだか楽しそう。ね、早稀ちゃん」

「うん、そうだね」

「都ちゃんの「」「」に釣られて、あたしも思わず頷いた。やった。」

「それより、今日は早稀ちゃんのお悩み聞かないと。そのために二人呼んだんだから」

「あ、そうだった」

「あははっ、本人が忘れてどうするのよお。しょうがな

